

# 恩師探訪

## 無窮の時となる樽子山

(昭和三十九年七月一日〜同五十二年三月三十一日)

須田 薫先生

須田薫先生は現在、中国 河北大学名誉教授・特別客座研究員  
中国 天津外国語大学客員講師をしておられます。

能代高校において教鞭をとられた先生方に当時の思い出を綴っていただく「恩師探訪」のコーナー。今回は須田薫先生に筆を振るっていただきました。



昭和40年春の国語科メンバー  
右から嶋田主任、山田、大山、須田、高橋、白鳥の先生方

私の能代高校への異動は変則的なもので、聊か戸惑ったものでした。新学期も始まり、落ち着いた頃の七月一日の事であったから。能代農業高校三年三ヵ月で東雲原の草深いそれなりに懐かしい校舎を後にして樽子山の坂を上りきった校門をくぐり古色蒼然とした歴史と伝統を感じさせる校舎を前にして、これからの勤務校となる心の高まりを胸にしたのは本音といえよう。

かくして、十三年九ヵ月という長い期間―その間高橋の新校舎への移転もあったが、いずれも私にとつては忘れ得ぬ「無窮の時」となっている。感謝。  
赴任、即日時間割を与えられ、農高でのんびりして来た罰が当たったようなものだ。忘れ得ない二年E組(国立理系組)の連中からの、農高からの教師という訳が、質問責めに合う。あれこそイジメというのか。高飛車に彼等の質問に向かっていたものだ。  
翌年クラス担任となる。一年生で放課後の補習もなし、一年生の希望者を募り「源氏物語」の輪読会をやり、その連中から一年間の終いということか広辞苑を差し出され、それを今でも使っている。

クラス担任のことで言えば、先の生徒が三年生になった時、国立文系型を持つことになり受験時に国立大には半数ほど、あとはほとんど私立大の早慶・立命館・同志社と志望が固まり生徒と面談の上で志望の動機が理に通っている。その方向を強力に押し進め合格を見たものだ。ところが進路指導主事から、須田は能高には向かない農高に帰つたら、と職員室で声高に言われ、沈黙に徹したが、戒めにしては、進学校ならではの弊害のなせる暴言になるのではな



校門を入り、古色蒼然たる樽子山の前庭と校舎

い。と心の中で逆に正義感に燃えた。もう苦情は言うまい。良き思い出は応援関係として硬軟野球部がお陰で軟式では藤井寺に、硬式では甲子園に能高ならではの榮譽に浴し、応援団も喜びに浸ったものである。  
硬式野球部の太田久監督には応援団にも細心の配慮をされ世話を戴き、去りてなお厚く徳を感じており、特に、公舎が隣ということもあり有難いことでした。  
国語科にしても温厚な嶋田主任を柱にして、大山先生が中に入りよく纏まっていた。感謝。  
とまれ、能高では三度の担任に恵まれ、三度目に三年間担任した工藤真由美が能高第一の東大合格。拍手喝采に湧いた慶事もある。あれやこれや卒業生との交流は絶えない。毎年のように誰かがやつてくるのも能高無窮の心が沸き立つ。  
生徒から依頼されての仲人ながら、十六組の挙式に恵まれたのも無窮に繋がる。  
今は高齢者とはいえ、故郷の象潟町史編纂完了。にかほ市郷土史研究会の要として元気でやっていた。在校生、卒業生諸君よ。時來たれば鉄も金となる。松陵健児の魂を生かすべく良き伝統づくりに邁進せよ。

## 同窓生から

### 素敵な笑顔

加賀 麗子 (二十七期)



ついこの間私は、五十年ぶりで高校の同期会に出席しました。私にとつては初めての参加で、何方に会えるかと、期待と不安で胸が張り裂けそうでした。  
もつとも、小学校や中学で一緒だった方もいて、全く見知らぬ人ばかりではなかったのです。でも、心配無用でした。  
話しを重なるうちに、誰もが高校生だった頃の顔になり、一気に時空を越えてしまふから、不思議なものです。私は年甲斐もなく暫し、見とれてしまいました。  
それぞれの人生を、能代高校の卒業生という自信と誇りをもつて歩まれたのでしょうか。笑顔がそう語ってました。  
男性も女性も姿格好は、お世辞にも若いとは言えませんが、動作が若やいでいて、どの人も輝いていました。素敵に年を重ねられて、とても羨ましいと思つたほどです。  
最後に、皆さんで肩をくんで歌つた応援歌、これぞ能代高校生と、何だか、胸が一杯になりました。  
しゃべって、笑って、あつと言う間に過ぎた時間の短かったこと、とても残念でした。  
新制九期の皆さん、いつかま

たお会いしましょう。それまでお元気で。  
定年を迎える私たち  
団塊の世代



金澤 誠一 (三十七期)

私たはいわゆる団塊の世代といわれ、小中学校では五十人を超えるクラスで、後ろの壁まで隙間がないくらい机が並んでいた。中学校では九クラスあった。一五〇〇人が在学していたことになる。  
最近、能代に帰つたら、母校第二小学校の統廃合を知った。私たちが通っていたのはまだ古い木造の校舎で、廃校になる新しい校舎には、私たちの子どもが通うのだといわれ寄付を募っていた記憶がある。その校舎には私の子どもは通うことはなかった。団塊の世代の多くが進学や就職のために大都會に出たのである。私は九年前に千葉から京都に移り住んでいる。  
私たち団塊の世代はちようど定年を迎える歳である。私の大学の定年は七十歳であるためまだ十年は働けるのであるが、そろそろ能代が恋しくなつてきた。最近、機会ある毎に帰ることも多くなつてきたが、帰る度に実家のある畠町が寂しくなつている。かつて賑わいをみせた畠町銀座も、シャッターがおりているお店が目立つ。アーケードまで取り外され、裸の街になつたような印象を受ける。  
団塊の世代の地域デビューとかふるさとUターンとかいわれているが、団塊の世代の高齢化